

# 連体述語「ル・タ」と主名詞「もの」の存在性\*

南美英\*\*  
mossson@hanmail.net

## 〈目次〉

- |                   |                        |
|-------------------|------------------------|
| 1. はじめに           | 4. 連体述語の「ル・タ」と「もの」の存在性 |
| 2. 従来の研究から捉えた「もの」 | 4.1 「ル形」における「もの」の存在性   |
| 3. 考察方法と方向        | 4.2 「タ形」における「もの」の存在性   |
|                   | 5. まとめ                 |

主題語: 連体述語(attributive-predicate), もの(mono), ru形(ru type), ta形(ta type), 存在性(existence), 主名詞(head-noun)

## 1. はじめに

現代日本語の複文において、名詞を修飾する連体修飾構文は様々な観点から研究が行われてきた。特に、節をもって修飾される名詞、すなわち、「主名詞」を巡る議論は意味論的・統語論的な観点から数多く見られる。通常、主名詞に来るのは実質的な意味合いを有する名詞が多いが、所謂、実質的な意味を持っていない「の」「こと」「もの」といった形式名詞と見られるものも来られる。「の」、「こと」、「もの」のように前置する節を受取る構文を見てみる。まず、「こと」は前置する節と同格を成す事が多く、「の」は同格または主名詞になるのが普通である。

- (1) まるで運動部の合宿化、ボーイスカウトだね。もっと気のきいたものはないのかい。たとえばステーキとかシチューとかさ。(あ 27)

「もの」は修飾を受ける主名詞として機能するので、複文における一つの成分として成り

\* 이 논문은 2011학년도 경성대학교의 신입교수 정착연구비에 의하여 연구되었음

\*\* 慶星大學校 日語日文學科 助教授

立っていると言える。ところで、その成分が実質的な意味合いを持っているかを考えると一律ではないようだ。例文(1)の「もの」は「ステーキやらシチュー」といったある限られた「物」を指すに違いないが、例文(2)のように、文の成分であるとは確かであるが、限られた「もの」を表すとは言えない。

(2) 勤労働員が始まったころ、彼女らはその食堂で出す食事をとったものだ。(新 猫)

「気のきいたもの」の「もの」が「ステーキ、シチュー」といったようにある一定の限られた「もの」を表しているのに対して、例文(2)の「彼女らはその食堂で出す食事をとった」+もののように「もの」は文の外部に位置づける。連体述語の「タ形」と過去の語句が共起、すなわち、「勤労働員が始まったころ」と呼応し、過去のある時期の継続的な行為を表し、ある限られた何かを指すとは思えない。要するに、連体修飾を受け取ってはいるが、主名詞として機能する「もの」が担当する意味機能は限られた何かを表すものもあるが、そうではないものもありうるということである。さらに連体述語の「ル・タ」対立を通して、修飾される「もの」がどう判断されるかについて考察を図る必要がある。これらが複文の意味構文によってどのように左右されるかまたはどういった深い係わりを持っているかの探求が本稿の目指すところである。

そのため、まず従来の研究を通じて行われてきた「もの」を巡る様々な意味特性や構文環境を踏まえていく。それから、節をもって修飾される主名詞の「もの」に焦点を当て、連体述語の「ル・タ」対立を通して「もの」の指す対象が「何か」を表すものかそうではないものかに分けて、「ものだ」構文を捉えて考察していく。

## 2. 従来から捉えた「もの」の様相

寺村(1981, pp.752-753.)でモノは五官によって知覚される存在物ではないが、個別的にそこに存在することが確かめられるという意味では「具体的」な対象であると言っている。眼に見えたり舌でなめたり指でさわったりできるのではないが、あたかも眼に見え、指で触ることのできるように、心理的な実態感覚のあるものといってよいと述べる。

言い換えると「もの」は特定されなくても漠然と何かを表すという点で通じるものであ

る。また、「もの」は品詞論の側面からは「こと」「の」などと括られ、「形式名詞」と呼ばれる類で、これらは実質的な意味を有していないため、主に指示表現や修飾句などを付け加えて文の成分として機能する。

複文のレベルにおいては、「の」と「こと」は埋め込む節(名詞節とも)と捉えられるのに対して、「もの」は通常、修飾される主名詞として機能すると言う。表記上において漢字で示される「者」、「物」と助動詞的用法をはじめ様々な意味特性を表す「もの」と捉えられる。ところが、表記上の規則は殆んど「もの」で表されるのでその形における使い分けは意味のないことである。

- (3) そのパラソルは新調のものではありましたが誰の目にも安物とは思われないような品でした。 (新 痴)
- (4) 私たちはよく連れ立って呉服屋やデパート・ストアへ裂地を探しに行ったものでした。 (新 痴)
- (5) 人間は親孝行をするものだ。 (作 例)

例文(3)では「もの」が「パラソル」を受け、例文(4)の「もの」は何かを受け継ぐものではなく、助動詞的用法と考えられる、過去の習慣や経験を表す「ものだ」を帯びている。

一方、例文(5)の「もの」は「人間」に代用されるのではなく、名詞述語文での主名詞に「だ」をつけ、「当為」という助動詞的用法として機能している。要するに、例文(3)と(5)は「一は「もの」だ」という構文から共通しているが、前者の「パラソル」が「もの」に代用されるに対し、後者の「人間」は「もの」を表す事ではなく、主題であり、「もの」は「親孝行をする」を実行する当為性を表す、助動詞的な意味機能をするものだと言えよう。

文末の「もの」の意味特性をより詳しく分類したのは坪根(1994, pp.65-77)を挙げることができ、文末に来る「ものだ」を対象に、「もの」が本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説といった意味用法を表すと整理・分類する。この中で解説・説明を除くと「ものだ」の殆んどは「一般性」を表す属性と何らかの関わりを持っていると主張した<sup>2)</sup>。

1) 坪根由香里(1994, pp.65-77)は助動詞的「ものだ」を以下のように意味類型化する。

- ① 本性・性質：年をとると女性はお腹が出るものだ。
- ② 当為：日本では家にあがる時、靴を脱ぐものです。
- ③ 説明・解説：今月から値下げをするのに対抗したもので…
- ④ 回想：当時、洗剤がないか探しまわったものだ。
- ⑤ 感情・感慨：不思議なことが起るものだ。

2) これに対して藤井(1996, p.50)は「ものだ」が「一般性」という意味を共通して持つと言うためには「感情・

一方、修飾を受ける主名詞「もの」とモダリティー(助動詞的用法とも)の「ものだ」を連続性や段階別として述べた研究として北村(2001, pp.32-42)<sup>3)</sup>を挙げることができる。

所謂、「ものだ」で終わる文を連体修飾節部の時間的限定性から助動詞的用法と連体修飾部が非アクチュアルなものであると考察している。このように従来の「もの」に関する様々な研究は助動詞的「ものだ」の意味用法をどう捉えるかに焦点が絞られている。

ところで、本稿が上記のような従来研究を通じて論じたいところは「ものだ」の意味用法をより詳しく分析し、評価・類型化するためではなく、例文(1)のように「もの」が何らかの存在を表す場合と、所謂例文(4)(5)のように「助動詞的」な意味用法として解釈される場合において、構文上の特徴と意味関係が知りたいからである。これについて、詳しい方法と展開方向を次の節で述べることにする。

### 3. 考察方法と方向

従来の研究から「ものだ」の意味用法に「本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説」といったようにある程度、類型化できたと思われる。そこで、本稿では修飾を受ける「もの」を対象にしながら取分け、「もの」の存在性の有無に焦点を当てて分析していきたい。そのため、先ず、節で修飾される「もの」構文を主な対象にし、その中で、連体述語が「ル形」の場合と「タ形」の場合とに分け、その対立を通して、「もの」の存在性の有無を把握することにする。連体述語の「ル・タ」対立を分析の方法として取り入れたのは、連体修飾構文の研究では、連体述語と主名詞との意味・構文的関係を通して究明されることがあるからである。

特に「もの」がある特定の存在を表すという具体的な意味を持たない「形式名詞」である場合、連体述語<sup>4)</sup>の「ル・タ」対立はより効果的ではないかと考えられる。また、連体修飾を受ける主名詞「もの」を持つ文は多くの場合、主節述語として名詞述語文であるのが普通であ

---

感慨」をの用法をどう説明するかを更に考える必要があるとした。

3) 北村(2001, p.32)によると

・「ものだ」の助動詞的用法略は、連体修飾部が非アクチュアルなもののことである。  
 ・「ものだ」文の各用法の意味は、「PはQものだ」で代表される「主題(P)―連体修飾部 Q―ものだ」という構文と、それに入りうる主題と連体修飾部の性格に密接に関係している。

4) 「昨日、ウサギが食べたものだ」のように連体述語「食べた」と「もの」には格関係が成立したり、「もの」と連体修飾構文の中の成分と「代用」関係の場合、存在性の有無は効果的である。

る。そのため、動詞が主節の述語に来ることは名詞述語文に比べ、あまり多くない。

- (6) すぐにも応諾したいと思う、だが心の奥底で呼び止めるものがある。 (新 点)
- (7) あれからたった半年、いま目のまえに櫓をこぐ可憐なすがたは、ふかい感慨をそそるものがある。 (新 二)
- (8) 私の求めているものは普通の女性が求めているのとは天と地ほどの違いがある。 (新 二)
- (9) 情死したものを深追いしても無意味じゃないかと言った事がある。 (新 痴)
- (10) 「モンダイを早く解いた「もの」から持ってください」 (作 例)

上記の例文(6-8)から分かるように、連体修飾を受ける「もの」構文の主節述語として動詞が来る場合、動詞であっても「ある」「(違いが)ある」といったような状態・存在を表す動詞類や(9-10)のように動作性の意味合いを有しても、「て形」動詞類にとどまるのである。というわけで、連体修飾を受ける「もの」の分析には主節述語として名詞述語文や動詞の主節述語としては「存在・状態」が中心となるので、品詞や動作性を取り扱う主節述語はその考察対象からは外した方が好ましい。

- (11) 目に見えるものがほしい。 (新 金)
- (12) 山形市にいる米兵なのであろう。後方に砂塵を濛々と立てているものだから、徹吉は慌てて道端に退避し、よろけてすんでのところで溝に落ちそうになった。 (新 榆)
- (13) それはタラバ蟹とコンビーフとアスパラガスの罐詰で、当時すでに珍しくなっていたものだし、殊にあとの二つは敵国アメリカの製品であった。 (新 榆)
- (14) 時はいずれは敵の上陸は必須のものと考えられていたし、戦車の姿はいかに力強く頼もしく見えたものだ。 (新 榆)

上記で書かれたように、連体修飾を受ける「もの」構文の主節述語が名詞述語文や動詞述語文であっても「存在・状態」に限られるに対し、連体述語の場合、述語に品詞的制限がないようで、「ル・タ」の対立を通じて「もの」の存在性の考察ができると考えられる。例文(11)と(12)は連体述語が「ル形」でありながら、前者の「もの」は存在を表し、後者の「もの」は説明を施している。例文(13)と(14)は連体述語が「タ形」であり、其々の「もの」は「存在」、「解説・説明」の機能を果たしている。(11)から(14)までは、普遍的な枠組での例文である。

それでは存在を表す「もの」の他、所謂「本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説」といった意味用法が連体述語の「ル・タ」対立の中、どのように位置づけられるか次

節で詳しく見ていくことにする。

## 4. 連体述語の「ル・タ」と「もの」の存在性

連体修飾を受ける「もの」構文を大きく「ル形」連体述語文と「タ形」連体述語文に分け、それを受け持つ「もの」の存在性のありかを考察する。ここでの存在性<sup>5)</sup>というものはある限られた何かというもので、それが具体的な何かであれ、抽象的な何かであれ、限られた「もの」として捉えるなら「もの」が存在を表すと見なす。これに対し、存在を表さない「もの」は所謂「本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説」といった助動詞的な意味用法の一つに属することと考えられる。それでは存在を表す「もの」と表さない場合を連体述語の「ル・タ」を中心として見てみよう。

### 4.1 「ル形」における「もの」の存在性

通常、連体修飾構文の研究において連体述語のテンスが働くと、連体述語と「主名詞」が一つの文で繋がっていると言う。

(15) a. 窓から見える海辺に行きたい。

b. 窓から見えた海辺にもう一度行きたい。

(作 例)

例文(15)aとbを比べてみる、前者は「窓から見える」という属性を持つ「海辺」全てを表し、後者は「窓から見えた」という特定済みの「海辺」を表している。「海辺」が具体的なものを表す名詞であれば、「ものだ」となると形式名詞から助動詞的な意味用法になってしまうというところで「もの」とは異なっているが、逆にそれこそ考察する価値があると主張したい。

(16) 弁当包みを持って家を抜け出して、隣の部落へ行こうとしていた有為子が、待ち伏せしていた憲兵につかまったこと。その弁当は脱走兵へ届けるものに相違ないこと。(新 榆)

5) 本稿での「存在性」というのは「物」「者」だけでなく、具体的な意味合いは持たないが、ある限られた存在を帯びていることを指す。

- (17) たしか上級生が言いはしなかったか、ゲートルはゆるく巻いとくものだ。 (新 楡)

上記の例文(11)の「目に見えるもの」ように「もの」が何の前触れもなく、一般的な物体を表すものとして出てくることもあるが、例文(16)の「その弁当」、例文(17)の「ゲートル」のように具体的な言及の後、代用として「もの」が用いられることもある。

- (18) ドイツ銀行(ニューヨーク)のアナリスト、アラン・ラスキン氏は、今回の消費者物価統計は「深刻なデフレリスクがあるとの議論に対抗するものだ」とし、バーナンキFRB議長が前週に示したようなハト派的な見方を示すに当たり、低インフレに重点を置くことは今後難しくなるとの見方を示した。  
(<http://www.asahi.com/business>)
- (19) 中国発のスタイリングコンセプトについて、中村氏は多くを語ろうとしないが、ロンドンやサンディエゴ、厚木の各スタジオが提案したアイディアに勝るものだったとしている。  
(<http://www.asahi.com/business>)

所謂、報道文に使われる「もの」は限られた存在を表さず、「解説・説明」という意味用法として機能すると言われているが、例文(18)と(19)で連体修飾を受ける「もの」はそれぞれ「今回の消費者物価統計」と「中国発のスタイリングコンセプト」を受け持つことで、「もの」は「解説・説明」に属する助動詞的用法として解釈されながらも、「代用」の機能として存在性を帯びているのが見られる。ここで注目することは存在を表す「もの」の助動詞的用法と意味解釈される「もの」とは全く異質的なものではないということである。

ところで、「解説・説明」の意味用法として機能する「もの」が存在を表すようになったのは連体述語の意味特性にも一部の係わりがあるのではないかと考えられる。というのは、例文(18)と(19)の連体述語は「対抗する、勝る」のように比較の対象を求める意味合いを有しており、「もの」にその対象になる存在を帯びらせるようになったのではないかと考えられる。次に存在を表さない「ル形」の「もの」である。

- (20) …んなところに病院を建てて、一体患者がくるものだろうか? (新 痴)
- (21) 周ちゃんにそれをあげたいものだわ。 (新 冬)
- (22) 一体病院がそんなことをしてもいいものですか? (新 痴)
- (23) 藍子は常日ごろ身辺に絶えぬSの手紙のことを考え、これだけとんでもなく焼けた顔を彼

---

6) 連体修飾構文とそれを受ける「もの」に格関係が成立し、存在を表すのはこの節では当然の事であるので論外にする。

女らに見せてやりたいものだった。

(新 冬)

上記の例文(20-23)から共通しているのは、「もの」を中心とする文末構文が働き掛けやまたは助動詞的用法として「感動・感慨」を表す意味特性となることである。

(24) 「自分が裏切り者だとは思っていない。僕らはプロだ。僕の心はサッカーとつながっている。どの選手も最高のレベルを目指すものだと思う。」 (<http://www.asahi.com/sports/soccer>)

(25) 同政府当局者は、ドイツの二国間支援は支援に適切なビジネスモデルの構築など特定の条件に基づくものの、ギリシャの再生能力への信頼を示すものだとしている。

(<http://www.asahi.com/01307180042.html>)

(26) その上で「喉の渇きを癒すために毒を飲むような」行為は地域の安定を脅かすだけでなく、

日本の右傾化を助長するものだと批判した。

(<http://www.asahi.com/international>)

先行で触れたように例文(18-19)が報道文の類型でありながら「もの」が存在を表したのは連体述語の意味特性によるものだが、例文(24-26)の「もの」はまさに典型的な報道文であって、「解説・説明」の機能を果たしている。要するに、連体修飾を受け取る「もの」構文は連体述語が「ル」で表されると、助動詞的用法においても存在を示す意味合いを有することができる。

## 4.2 「タ形」における「もの」の存在性

連体述語が「タ形」である場合、「ル形」と主名詞「もの」に生じる存在性との違いの有無について考察してみる。

通常、連体述語が「ル形」で主名詞が普通名詞の場合、「タ形」より属性化されやすいので主名詞は特定しにくくなると言われる。ところが、主名詞が「もの」の場合、どう異なるか、そして存在性はどう表われるかを見ていく。

(27) 尺八は返してもらったものであり、字引は贈物と考えて、二つとも一旦柏木に帰属したものだから、それを売った五百円はやはり柏木の金で、二千五百円にこれを加えて、貸金は当然三千円になる。

(新 楡)

(28) そればかりではない、長女の龍子にしろ次女の聖子にしろ、当時にしてはかなり風変りの尖端的な名前といえたが、実は楡基一郎という姓名そのものが自らのハイカラな感覚に



よって創造されたもので、彼が親から貰った名前は似てもつかない田舎じみたものだったのである。 (新 榆)

(29) それはそうに違いない。その丸薬は基一郎の処方をも自分の病院の薬局でつくらせたものだったし、ケー・エヌというのは自分自身の頭文字なのである。 (新 金)

(30) 拿捕された貨物船の積み荷には、地对空ミサイルシステム2基、ミグ21戦闘機2機、同機エンジン15基などが含まれており、その全てが旧ソ連時代の兵器で20世紀半ばに製造されたものだった。 (<http://www.asahi.com/international>)

(31) この器具はなんでも目新しいものには手を出す基一郎がアメリカから持帰ったものだが、別段技術を要するものではない。 (新 金)

例文(27-31)における連体修飾を受ける「もの」はある限られた存在を表している。これらの「ものは」それぞれ「字引、基一郎、丸薬、地对空ミサイルシステム2基、ミグ21戦闘機2機、同機エンジン15基など、器具」に代用されている。

中にも特徴的に「帰属した、持ち帰った」を除くと「創造された、つくらせた、製造された」といったように製造に関わる動詞類が用いられ、「もの」の存在性をより強調している。

連体述語が「タ形」の場合、連体述語が製造動詞ならば「もの」の存在性が目立つがそうではない場合、「もの」の存在性は「ル形」よりは低いと考えられる。再び、「帰属した、持ち帰った」動詞類も所有を表す意味合いを帯びており、「もの」の存在性を目立たせている。次は連体述語が「タ形」でありながら、「もの」が存在を表さない場合である。

(32) いやな奴が隣室にはいつてきたものだ、と行助はがっしりした体格の広田を眺めて思った。 (新 あ)

(33) これでいいのだろう、思えば、俺は、あの父子のためにずいぶん和高価な時間を費やしてきたものだ。 (新 あ)

例文(32-33)の「もの」は「解説・説明」を表し、存在性がないと思われる例文であるが、文脈の状況から考えると断定しにくい場面のことである。存在を表す「もの」でないと、「本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説」の意味用法から考えるべきであるが、上記の例文(32-33)の「もの」はこれらには属さない意味用法と見なされる。つまり、「もの」は断定を表す「解説・説明」でもなく、過去の回想とも言いがたい用法である。かえって「だろう」に近い「推量」でありながら更に「思う」と呼応しているところでも共通している。

- (34) パナマ当局が船員を拘束して調べている。米メディアによると、キューバ政府は「旧式の兵器を修理するため北朝鮮に送ったものだ」との声明を出した。

(<http://www.asahi.com/special>)

- (35) シティー・インデックスの首席グローバルストラテジスト、アシュラフ・ライディ氏は「景気が現在の緩やかな拡大基調をたどる限り、秋ごろに資産買い入れの縮小が始まり、来年に購入を停止するとの方針をあらためて表明したものだ」と語った。

(<http://www.asahi.com/business>)

- (36) 昨年衆議院議員に当選したとき、院長は秀吉を呼びよせて、いつもの何層倍も親しみのある、人をそらさない、誰でもこの院長のためなら身を粉にして発奮せざるを得ないような口調で言ったものだ。

(新 痴)

- (37) 村にいた頃から甚作は百姓を嫌い、百姓じみた自分の名を嫌い、自分は決してこんな名前で一生を過さないと広言していたもののだが、いま彼は、基一郎という兵六玉の四男坊らしからぬ名前に変っているばかりか、一体どのような口実をもうけたのか、天変地異そのままに、姓までが変っていたのである。

(新 榆)

- (38) たとえばさいづち頭の看護人が朝、残り物の魚の頭を食べて太い骨を喉に立てたとき、たしかにこれは規いだけの範圍にとどまらず、薬局から医局へまで騒ぎが波及したものだ。

(新 榆)

例文(34-35)は典型的な報道文として解釈されるなので「もの」が「解説・説明」を表しているのは言うまでもない。ところが、例文(36-38)においても典型的な報道文ではないものの、主節述語の意味特性が伝達を表す動詞類で、報道文の「もの」と変わらない解釈となるので同じ枠組みの中に位置づけられる。

それでは、連体述語の「ル・タ」対立が「もの」の意味用法に及ぼす影響は「当為」と「過去の回想」を表す意味用法の場合、その相違点が著しい。まず、「当為」を見ていくと、

- (39) a. 人間なら親孝行をするものだ。  
b. 人間なら親孝行をしたものだ。

連体述語「親孝行をする」を、「ル形」にした(39a)の「もの」は当為を表し、「タ形」にした(39b)の「もの」は「本性・性質」を表している。次に「過去の回想」は必ず連体述語「タ形」と表されるが、通常「過去の時」を表す語句と呼応する。

- (40) 以前は無用と思われる人間まで松原の本院にはごろごろしていたものだが、次第にその数

- が減り、看護にしる事務にしる今は人手不足の状態を示してきた。(新 痴)
- (41) あの当時は極度の緊張のため機械的に徹吉はその営みを続けたものだが、いま更めて追想すると、どうしようもない空虚さが胸を浸した。(新 榆)
- (42) 冬、伊助や書生たちは立枯れた鉄道草の茎を刈取り、風呂の焚きつけにしたものだ。(新 榆)

上記の例文の中で「過去の時」を表す「以前、あの当時、冬」といった語句が「過去の回想」へと導く。もし、「過去の回想」の語句がないと、「もの」の意味用法は「本性・性質」または「解説・説明」と扱われることになる。以上のことから連体修飾を受ける「もの」の考察に連体述語の「ル・タ」対立を取り入れるのは、意味用法の解釈という観点からは有効であることが分かった。

## 5. まとめ

以上から連体述語を受ける「もの」の存在性を連体述語の「ル・タ」対立を中心として考察を行った。

普通、具体名詞としての「もの」は「物」または「者」という実質的な意味を持っている。一方、形式名詞として使われる「もの」は連体修飾を受ける主名詞として働くとき、ある限られた存在を表したり、所謂「本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説」といった意味用法として働いたりする。

それでは果たして修飾を受ける「もの」が存在を表す時とそうでない時は構文上どう異なっているのか。本稿ではこれに焦点を当てて考察を行い、特に連体述語の「ル・タ」対立を通して「もの」の存在性と意味用法を調べた。考察の結果、大きく二つに分けて纏めてみる。一つは存在を表す「もの」とそうでない「もの」が連体述語の「ル・タ」対立である。もう一つは、存在を表さない、連体修飾を受ける「もの」が連体述語の「ル・タ」対立を通して様々な意味用法からどう捉えるかである。

先ず、存在を表す「もの」とそうでない「もの」が連体述語の「ル・タ」対立からどう捉えられるかから考察を行った。連体修飾構文の研究で一般化されている論の一つとして連体述語のテンスの所在が問われるものがあって、テンスが働く「主名詞」と構文的な関わりが深いと言われるが、これが修飾される主名詞「もの」と存在性という観点からどういうように

適用されるかから考察を行った。

その結果、連体述語を受ける主名詞「もの」は連体述語の「ル・タ」の対立とは深く係わりを持たないどころか、逆に「ル形」の場合、「もの」の存在性が目立ち、「タ形」を取ると、所謂「もの」の助動詞的な意味用法である「本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説」と解釈された。大体の場合、連体述語の「タ形」と主名詞「もの」は助動詞の意味用法として捉えられた。

それから、連体修飾を受ける「もの」構文を研究の対象にする時、存在を表す場合とそうでない場合、片方に傾けないことと、これが連体修飾を受ける「もの」構文の特徴というのが分かった。

要するに、「もの」が存在を表す場合は大体「代用」として機能し、先行文脈で一回繋がっているもの指すので、前文の領域まで広げる必要がある。一方、連体修飾を受ける「もの」が存在を表さない場合は「もの」に繋がる主節の構文と深い関わりを持っているので、これも連文の領域で考察すべきである。

以上の考察を通して述語を受ける「もの」と「ル・タ」対立は深い関係で結ばれ、特に「ものだ」の意味用法と深い係わりを持っていることが分かった。今後の課題として、連体述語「ル・タ」と「ものだ」の意味用法についてより細分化し、考察を行いたい。

### 【参考文献】

- 揚妻祐樹(1991)「実質名詞「もの」と形式的な用法とのつながり」『東北大学文学部日本語学科論集』1 東北大学出版
- 北村雅則(2001)「モノダで終わる文—連体修飾部の時間的限定性からの考察」『名古屋大学国語国文学名古屋大学出版部』
- 坪根由香里(1994)「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』日本語教育学会
- 寺村秀夫(1981)「「もの」と「こと」」『馬淵和夫博士退官記念、国語学論集』大修館書店
- 村田昌己(2001)「モノ・コトの用法から」『同志社国文学』同志社大学
- 野田春美(1995)「モノダとコトダとノダ—名詞性の助動詞の当為な用法」『日本語類義表現の文法(上)単文編』くろしお出版
- 藤井ゆき(1996)「文末の「モノダ」の意味・用法」『広島大学留学生センター紀要6』広島大学出版部

### 【参考資料】

本稿の例文に出典がないのは「新潮文庫100選」から抜き出したものにする。

新潮文庫 100選

猫：猫の事務所

痴：痴人の愛

金：金閣寺

二：二十四の瞳

点：点と線

楡：楡家のひとびと

冬：冬のたび

「十八の夏」 光原百合 2002 双葉文庫

「ある閉ざされた雪の山荘で」 東野圭吾 2010 講談社文庫

### 【参考サイト】

[www.google.co.jp](http://www.google.co.jp)

[www.yahoo.co.jp](http://www.yahoo.co.jp)

<http://www.asahi.com>

---

논문투고일 : 2013년 12월 10일  
심사개시일 : 2013년 12월 20일  
1차 수정일 : 2014년 01월 09일  
2차 수정일 : 2014년 01월 15일  
게재확정일 : 2014년 01월 20일

---

---

 <要旨>
 

---

## 連体述語「ル・タ」と主名詞「もの」の存在性

連体修飾を受ける「もの」を存在性を帯びるものと存在性を帯びないものとに分け、連体述語の「ル・タ」対立を中心に考察した。

考察の結果、大きく二つに分けて纏めることができる。一つは存在を表す「もの」とそうでない「もの」が連体述語の「ル・タ」対立からどう表されるか。もう一つは存在を表さない、連体修飾を受ける「もの」が連体述語の「ル・タ」対立を通してその様々な意味用法からどう捉えるかである。

まず、存在を表す「もの」とそうでない「もの」が連体述語の「ル・タ」対立からどう捉えられるかから考察を行った。連体修飾構文の研究で一般化されている論の一つとして連体述語のテンスの所在が問われるものがある、テンスが働く「主名詞」と構文的な関わりが深いと言われるがこれが連体修飾を受ける主名詞「もの」と存在性という観点からどういうように適用されるかから考察を行った。その結果、連体述語を受ける主名詞「もの」は連体述語の「ル・タ」の対立とは深く係わりを持たないどころか、逆に「ル形」の場合、「もの」の存在性が目立ち、「タ形」を取ると、所謂「もの」の助動詞的な意味用法である「本性・性質、当為、過去の回想、感情・感慨、説明・解説」と解釈された。大体的場合、連体述語の「タ形」と主名詞「もの」は助動詞の意味用法として捉えられたのである。

それから、連体修飾を受ける「もの」構文を研究の対象にする時、存在を表す場合とそうでない場合、片方に傾けないことと、これが連体修飾を受ける「もの」構文の特徴というのが分かった。要するに、「もの」が存在を表す場合は大体「代用」として機能するので、先行文脈で一回繋がっているものがある、前文の領域まで広げる必要がある。一方、連体修飾を受ける「もの」が存在を表さない場合は「もの」に繋がる主節の構文と深い関わりを持っているので、これも連文の領域で考察すべきであることと纏めることができる。

## On study of attributive-predicate and head-noun[mono]

The subjects of this study is head-noun [mono], and the[mono] was divided by the existence and non-existence. attributive-predicate [ru / ta] were mainly investigated. The head-noun [mono] of the relative clauses and [ru / ta] is related. The case of [ru] mainly appears existence, the case of [ta] mainly appears [essentiality, appropriateness, Memories of the past, emotions, explanation] of [mono]. And have to extend the scope of the investigation until sentences precedence. Because [mono] that appears existence mainly functions [substitute]. On the other hand, If the existence of head-noun [mono] head-noun does not indicate, Have to the relationship between the main clause and should be investigated in Sentences.